

34 フロレンス・ナイチンゲールは我が国にどのよう¹⁾に紹介されてきたか

上坂良子¹⁾・水田真由美²⁾

¹⁾看護史研究会

²⁾和歌山県立医科大学保健看護学部

我国にフロレンス・ナイチンゲールがどのように紹介され、その思想がどのように浸透したのか、及んだ影響については医療や看護の分野だけではなく指摘がいくつかの先行研究で示されている。しかし、その文献史料には十分には調査されていない。今回、明治期を中心に探索可能な範囲で蒐集を試み、この段階での考察を加えた。

欧化政策を掲げた初期の明治政府は、海外からの情報移植には寛大であり、特にキリスト教を背景にした女子教育において著しいものがあつた。このような時期、看護教育の話題が生まれるのだが、海外の宣教女性たちが病気になる時に、看護を希望しても正規の

教育を受けた看護婦が日本にはいないという驚きからであつた。このような背景があつて我国は、英米近代看護の影響を受けることになる(一八八三)。既に、医学はドイツだけでなくイギリスへの留学が行われており、海軍の関係ではセント・トーマス病院へ留学する医師は多くいたことが伺える。クリミア戦争(一八五三―一五六)も過去となり、セント・トーマス病院はナイチンゲールスクール(一八六〇)が近代看護教育の先駆的存在として影響力を発揮していた。優れた教育効果のあることを知った医師を始めとする日本の知識人がナイチンゲールに面会して教示を仰いでいたことも明らかにされている。このように「ナイチンゲール」の我国紹介が始まるが、医療や看護以外の分野にも波及し、やがて国策として日本の土壌に根付いていく過程が始まる。

調査する迄、いくつか疑問があつた。先行研究にはナイチンゲールに出会つた知識人や医師たちが、看護教育に関して高い評価を語っている。その一方、彼女が上流社会層の身分でありながら看護法を学んだこと

やクリミア戦争の救護活動の状況、その結果、国家的国民的榮譽を与えられたことなどが愛国心、また、慈善・博愛の推奨事例となる文献も示している。当時の国益（戦時への思想）として国民に浸透していくには、時局的な史料が多数あるのではないかと考えた。

そこで、可能な範囲の「ナイチンゲール紹介文献」を探索してみた。潜在する史料はこの後に見出せるかもしれないが、この時点では紹介文献初出を明治一二（一八七九）年にしておこう。しかし、この文献の著者（アンダーソン。セント・トーマス病院医学校卒で医学校教授歴あり）は「看護覚え書」の存在を知っていたであろうと考えるが、一六四頁に及ぶ海軍の看護人を対象とした「看病要法」には、「看護覚え書」と類似がみられても「ナイチンゲール」という固有名詞は見当たらなかった。

今回は雑誌類の探索が十分でないことが課題となったが、意外だったことに明治期だけで六十点近い文献（主に書籍）を抽出できたことである。

一・社会的に高い階層に属す女性が、貧しい階層の

人々を対象に慈悲心や博愛心を持って看護した「看護婦像」について。宗教的な面ではナイチンゲールの言動を聖句で説明した書籍も出版されてはいる。

二・立志する女性、良妻賢母のみならず、愛国心を持つ富国強兵の母として尋常小学校、女子修身教科書に、困難に立ち向かい目指す「女性像」として用いられた。

三・クリミア戦争での活動を伝える記事では看護の「女性」も一部語られるが、「戦時の女性像」として前述二点を加味したプロパガンダとしての一面が印象に残る。

明治期、ナイチンゲールという女性が美化され、伝説化されて国民に浸透して行くが、紹介文献から経時的に見えてくる女性像を大別した三視点で考察する。